三　北条氏綱の時代

1　北条氏を名乗った氏綱

一五一八年に早雲のあとをついだ二代目の氏綱は、さらに勢力を広げて、戦国大名としての地位を確かなものにしていきました。

相模の国の支配を進めていた北条氏は、一方でこれまで相模に勢力を持っていた人たちから、他の国から来た反逆者とよばれて反発を受けるようになってきました。そこで氏綱は、これまで使っていた名字を「伊勢」から「北条」に改めました。自分たちが相模の国を支配することが正しいと思わせるために、関東にゆかりが深く、鎌倉時代の執権（将軍を助けて政治をおこなっていた人）でもあった北条氏のあとをつぐ者を名乗ったと思われます。朝廷での地位を示す官職（左京大夫）も執権の北条氏と同じものになり、家の格も、まわりの今川氏や武田氏、上杉氏と対等になりました。

2　関東制覇への道

武蔵（今の埼玉県・東京都・神奈川県東部）への進出をめざした氏綱は、一五二四年に江戸城を攻めました。江戸は多くの河川が集まり、関東平野の内陸や下総（千葉県北部）に支配を広げる拠点となる場所でした。

当時関東地方で大きな力をもっていた山内上杉家と扇谷上杉家の二つの上杉氏は、同じく関東地方で力をもっていた武将たちと手を結び、力を広げる北条氏に対抗しました。しかし氏綱は、扇谷上杉氏の拠点の川越城（今の埼玉県）を奪うと、次の年には葛西城（今の東京都葛飾区）を攻め落としました。ついには有力な武将を破って、「関東管領」という大切な役目につくことになりました。こうして、北条氏の関東地方での地位はより確かなものになっていきました。

多くの敵に囲まれ、厳しい状況にあった氏綱でしたが、敵の身内の中での争いを利用して対抗しました。この時代は、一族のあとつぎを誰にするかで、その一族や家来たちが争うことが多く、一族の中での争いが、自分たち自身の力を弱めることになっていました。「身内で争わなければならないとは、なんとおろかなことだ。北条氏はそうはなるまい。」と、おそらく氏綱は考えていたことでしょう。氏綱の父である早雲も、そうした身内の中での争いをおこさないため、亡くなる前に、自分のあとつぎを氏綱とすると定めていたのです。そして氏綱も、その後の北条五代の武将たちも、早雲の考えを引きつぎ大切にしたので、北条氏の人々の間には、あとつぎ争いなど、一族の間での争いが起こることはありませんでした。

さて、氏綱が房総半島や関東平野の内陸地に支配を広げている間、西の駿河の国はどうなっていたのでしょうか。当時の駿河の国は今川氏が支配をしており、今川氏と北条氏は、早雲の時には主人と家来の関係でした。駿河地方で強い力をもっていた今川氏ですが、今川氏輝が急に死んでしまうと、二人の弟たちの間で、あとつぎをめぐる争いがおこりました。氏綱は今川義元を応援し、義元は正式に今川氏の

あとつぎになることが決まりました。ところが、その義元は、当時、氏綱の敵であった、甲斐の国（今の山梨県）の武田氏と同盟を結んでしまったのです。

「なんということだ・・・。これでは何のために義元どのを応援したのかわからないではないか。父のときから関係が深かった今川氏ではあるが、もう自分たちで進むしかない。」

と、氏綱は今川氏が支配する駿河を攻め、富士川（静岡県）から東側の地域を占領しました。この戦いによって、北条氏は今川氏から完全に独立したのです。

3　鶴岡八幡宮を建て直す

続く戦いの中で、鎌倉も戦場となり、源頼朝の時代から、武士の守護神であった鶴岡八幡宮もすっかり焼かれ、荒れ果ててしまいました。

戦いが一段落すると、氏綱は「八幡宮を立て直すことで、自分こそが武士のリーダーであると世に示すのだ。この機会を逃してはなるまい。」と、焼けてしまった八幡宮の再建を決意しました。八幡宮の再建は、自らが、鎌倉幕府の執権であった

北条氏や、関東公方など、これまで東国を支配してきた武家のあとをつぐ者であることを、周囲に知らしめることになりました。

また氏綱は、鶴岡八幡宮のほか、寒川神社や箱根神社・三島大社などに領地（寺領）を贈って守っています。この時代の人々は神や仏の教えを大切に思い、信じていましたので、寺や神社を大切にする氏綱を、人々はよりいっそう信頼するようになっていきました。寺や神社を味方にすることは、敵の小さな城を奪うことよりも、自分の領地を守るためには大きな力になったのです。

八幡宮の修復には実に十二年の長い年月がかかりました。この大工事のあと、人々は氏綱のことを「八ヶ国の大将軍たるべきこと疑いなし（広い世の中にあって、りっぱな大将軍であることはまちがいない）」と大変感心し、ほめていたと伝わっています。それほど、氏綱の名声は高くなっていったのです。

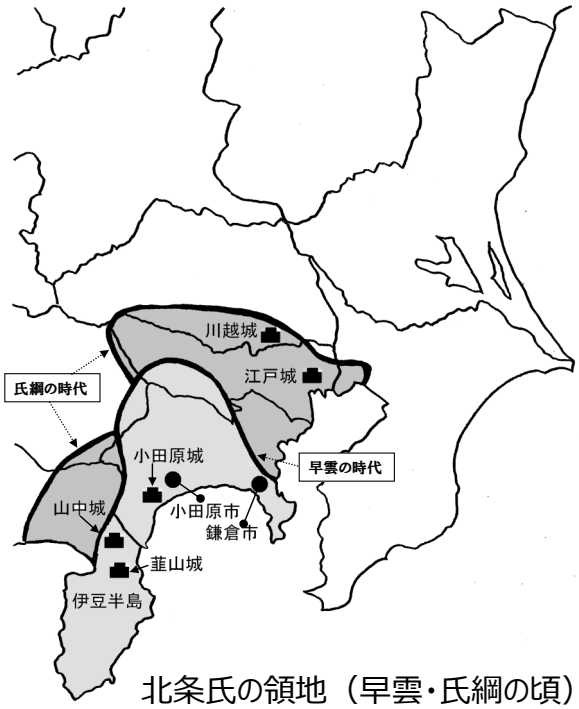
現在の鶴岡八幡宮

4　氏綱の領国支配

氏綱の時代、北条氏の支配する土地は、伊豆・相模から武蔵の南半分や上総（茨城県）・駿河の東部にまで広がりました。

氏綱は相模の国の小田原城を本拠地としました。そして、伊豆の国、武蔵の国にも城を置き、北条氏の一族や重臣をそれらの城の城主にしました。また、広がった領地で使う物資を運ぶために、馬を使って人やものを運ぶしくみを整えました。そして、検地によって確認された田畑を、北条氏が直接治める土地にするとともに、信頼のおける家来をその土地の役人に任命して、北条氏の支配をより確かなものとしました。

氏綱は、積極的に寺や神社、城を直しましたが、そうした大きな建物をつくるの



北条氏の領地（早雲・氏綱の頃）

には、刀鍛冶や鋳物師・宮大工・石工など多くの職人が必要でした。そこで氏綱は、全国からたくさんの職人を集めました。職人たちが住む小田原は、日本の多くのまちが戦乱で荒れはてていく中で、安全に住むことができる平和なまちであり、関東の中心と言ってもおかしくないまちになっていきました。職人たちの技術は「小田原漆器」や「小田原鋳物」として、今でも小田原に残っています。

5　虎の朱印状

北条氏には、虎の印判とよばれる家の印がありました。この印は、一辺が七・五cmの正方形の上の部分に、虎がうずくまり、「禄寿応穏」の文字がきざまれています。人々が平和にくらせるようにという願いがこめられていると言われています。

氏綱の時代からこの印が使われるようになりました。この印が押されていない文

書の命令は無効となり、役人が勝手な命令を出して、農民や職人から税を取ったり、労働にかり出したりできなくなりました。この印を使うことで、北条氏は、農民たちを直接支配するしくみをつくり、その地域を支配する力を一段と強めていきました。

虎の印判

6　氏綱の死

二つの上杉氏や今川氏との戦いが続いていた一五四一年、氏綱は病に倒れました。氏綱は、あとつぎを氏康と定め、五カ条からなる遺言状を残して亡くなりました。五五才でした。

その遺言とは、次のような内容でした。

- 義を大切にしなさい。義をおろそかにして国をとっても、後ではずかしい思いをする。　※義…正しいすじ道。人としてしなければならないこと。
- 武士から農民まで、すべての人を大切にしなさい。

・えらぶらず、へつらわず、自分の分限を守りなさい。※分限…身のほど。

・倹約につとめなさい。

・いつも勝っていると油断が生まれることを、忘れないようにしなさい。

この遺言には、父・早雲から領国を治めるための教えを受けつぎ、領地を広げながらも、堅実に生きることを大切にした氏綱の考え方がよく表れています。

四　北条氏康の時代

1　相模の獅子、北条氏康

氏綱のあとをついだ三代目の氏康は、「相模の獅子」とたたえられるほどの人でした。氏康は、関東地方から山内上杉氏を追いはらい、扇谷上杉氏をほろぼし、北条氏の力をさらに伸ばすとともに、領民のために、いろいろなきまりを整えていきました。